# 古厩忠夫『裏日本―近代日本を問いなおす』（岩波新書、1997）を読む

Postcolonial Studies 読書会 2

小谷一明

2013/7/25

# 序章

裏日本脱却へのイデオロギー例：
　・ナホトカタンカー流出事件と原発
　・信濃川取水問題（JRと電気、川漁文化）
　・ロッキード事件と角栄の集票～「民度」が低い新潟
　・巻の住民投票
→表とのずれ：近代化の相対化
　＊東北・沖縄独立論 /「裏日本」というまとまりはない
cf.「裏日本イデオロギー」（93，183–85項）

初出例：矢津昌永『中学日本地誌』丸善, 1895.
　北陸道の章における「北越」
　・北に去れる土地、越（高志）の地
　・東海道トハ腹背ヲナセリ
　・（列車で）東京に11時間55分ナリ　　（163-77項）

用語としての裏日本（山陰～北陸）
　言語としては1960年代以降使用が減る
　＊NHK～「日本海側」
　＊日本海～植民地主義の反映、海域住民の総意なし

観念・実態として残る中央集権的分業体制
　　＊石川「1959年縦貫線と単線・民営化・地方自立」参照
明治20年代 (1887-97) 「裏日本」形成期
　ヒト～人口増：太平洋ベルト地帯
　モノ～鉄道敷設　＊文化　石川「湖畔と佐渡、鉄道の思想」参照
　カネ～「上」からの交付金、銀行設立など

参照：『「裏日本文化」ルネサンス』

# １　形成過程

１　「裏」以前
・大和時代から～明治以前

みやこ人：辺境としての越
　化外の地；胡（えびす）、沙塞、靺鞨、任那
　⇔日本海住民：「陸の孤島」意識なし
　・近代以前は海と川が交通の要　　＊柳田国男「海上の道」
　・説話・唄の伝播、北前船などからわかる交流空間
　・独自の生活経済文化圏を形成していく
　・御細工者、船主の地域間価格差経済と政治力

明治前期（20年代まで）

・表・裏の差はなく、豊かさを誇る「裏」

米作（高い小作地率と商品化⇔東山道の養蚕）、綿作、金属製品、工場数（島根の鉱業）、近代企業の株主（北前船主）、北海道ー日本海貿易、軍都金沢＊「北の越」：南への対抗意識～金沢第4高校（29項）

→明治20年代（産業革命期）以降～表・裏の差

富国（？）強兵と機械制工業

＊明治25年(1892)鉄道敷設法～古厩の鉄道地図および1892年以前の鉄道については石川論文参照

２　移転システム―社会資本の格差形成：明治後期

裏：上からの補助なし→鉄道敷設後回し・帆船→汽船（交通・交易網の移行＊M39、1906鉄道国有法）、M32地方銀行増設（地租収奪）、教育機関・軍事施設の後回し（都市への人口流出促進）など

- 1873年、地租改正→寄生地主制・裏の小作地率5割（東北低い）：地代→殖産興業資金への吸い上げ
- 地租が租税の大半を占めた明治前期、「裏」の納入額トップ（日清・日露の戦費は地租増徴でまかなう）
- 資本の「本源的」蓄積＝裏が狙われる

→国外植民地獲得以前、不平等条約による外国貿易への怖れがあった＝国内の「後背地」化（36項）

# 裏の収奪と変容

- 銀行（地租→地代→興業）、北陸3県激増（42項）
  ＊山陰少ない
- 人口減：明治前期→後期、「裏」：トップからの下落
  ＊東北微増、「表」では呉・横須賀・佐世保など激増
- 出稼ぎ者数の増加：表の労働者形成と都市化～表の鼓動が伝わる裏⇔「東北」：土地との強固なつながり

Cf. 早朝仕事（風呂・豆腐・魚河岸）、厳寒地仕事（杜氏）、女工・出稼ぎ　＊嫁不足

- 米、エネルギー（石油、水力の発電）の供給と少ない工場数（明治後期でも）、軽工業のみ

３　北陸の半周辺性～大正時代（1912–1926）から昭和初期

人口流出2つのルート～表と北海道

- 北海道移民：次三男坊と倹約一旗組

農民の他海運業・漁業者～「越後商人・・・草も生えぬ」、開拓功労者

＊「海の道」という歴史、満州分村移民との類似性

- 環節としての北陸

＜東京・大阪―北陸―北海道＞

＊昭和6年(1931)、上越線全通記念博覧会＠長岡・寺泊（北海道館など）

＝＜表日本・裏日本＝表アジア―大陸・朝鮮＝裏アジア＞

「半周辺化」～国家援助の遅れと波及効果型発展構想

社会資本整備:「郷土の偉人」(信濃川治水、上越線敷設、大河津分水、高等教育機関)＋周回遅れの国家援助

長距離鉄道輸送時代と対岸への期待
、・日本海側の縦貫基幹鉄道路線～貨物輸送:海運から鉄道へ
　＊神戸―青森縦貫線は日露戦争後に構想、1924年に実現
・シベリア鉄道完成:東清鉄道との接続・拡張(大正5年、1916)
→シベリアブーム・ウラジオストク「欧亜の咽喉」
☆裏日本の重鎮を目指す各地
10日でヨーロッパへ行く「欧亜連絡航路」構想、対岸への日本海横断航路解説運動　＞新潟、伏木、七尾、敦賀、境・浜田港の競合
＊日露後の国際港・敦賀港:敦賀―浦塩、清津
　特に第一次大戦後、対露輸出、対中輸入の片貿易(多角貿易)
　「ウラジオ景気」、「ルーブル熱」(62項)

北陸の工業化

・在来産業・農村工業型の発展

繊維産業～力織機の導入、絹紬・人絹交織への転換

～「裏庭」の優位性と機業地の形成（福・石・富）

・従属型・半周辺化型の発展（1920年代＊宮本憲一「裏日本形成期」）

WWI期：北陸重化学工業の勃興期（カーバイド、硫安、硫酸、酢酸を扱う日本曹達、信越窒素、日本鋼管、北越製紙など）～電源開発・石油産業との連動　＊高岡工業地帯

⇔明治後期以降の公害：神岡鉱山・神通川、面谷鉱毒、鹿瀬、二本木工場など　＊「公害のデパート」富山、アセトアルデヒト工場集中の新潟、原発設置とのつながり

山陰

- 境港ー清津・大連航路を持つが北九州・下関（中国・南朝鮮）、北陸（露・北朝鮮）に圧倒され、地場産業の域をでられず
- 五州ー県構想あるも対岸への期待なし～表との連結性のなさ・直結ルートを持たないため（73–4項）

＊四国・東北の地域的不遇

日露後：帝国の裏日本意識～被差別感の薄れ

裏の特質を活かし対岸貿易のセンターへ⇒植民地経営の先陣争い

＊『中外』「帝国の重鎮」、「裏玄関」

＊満蒙調査会と『満蒙大観』（1932）

＊舞鶴港の商港化、四日市港築港と中部

# 2　自己イメージと「県民性」

１　裏日本観念の形成

- 裏の「立ち後れ」意識の醸成

明治維新から松方デフレ後の明治20年代まで：北陸＝「旧日本」は近代化過程における「時差」という認識

日清戦争（1894–95、M27–8）　＊「関西は・・・意外の収利をなし」

→明治30年代に「構造的格差」という認識が生じる

「天明以来の大洪水」：明治29年から3年連続の洪水

・治水問題～国の冷たい対応・県負担事業化（徴税・県債）

・社会問題：「国家の為めに貧困」、「北海道落ち」、赤痢、やぶこうじ、賭博、米穀商人襲撃の騒擾事件（津止め、外米輸入）、ハワイ・ペルー移（棄）民と思郷病（屯墾病）

裏日本論の登場

- 用語「裏日本」の登場と北陸近代史の転換点～明治30年(1897)頃

用語「裏日本」: M33頃、自然地理的＋「人事的」（財源・富・生活の程度、人口密度）側面を含む用語へ（志賀重昂）

地元民の使用は日露直後の1905、M38：
大増税とポーツマス条約＋治水・港湾・鉄道への不満
＊日比谷焼き討ちと大竹貫一の新潟凱旋帰郷
＊県議会での「裏日本」論議
＊「敗者（出雲から上杉）慣れ」と坂知事の生産額倍増計画
→産業化＝＜裏日本からの脱却＞というイデオロギー（93頁）

「県民性」論議と裏日本文化

豪雪（『北越雪譜』）、浄土真宗、高い有業率と低い転職率、自民党支持率トップ（96年現在）→互助（県人会）、勤倹貯蓄、「住めば都」、控えめ、朴直（兵士）、辛抱強い（女工）

＊「風土」的側面も考慮に入れた特質（99項）

　風土的要因で格差隠蔽・地域分業を合理化する（183項）

→イメージ・虚像の一人歩きと裏日本化

⇔近代化のエートスの強さ

＊裏・「こたつ文化」の思想家（鈴木大拙、西田幾多郎、北一輝、大川周明、平沢計七、高山樗牛など）：欧化の剔抉と包摂

３　裏日本の対外硬派と大正デモクラシー

日露講和反対:「表」の対外硬派と国権拡張への動き

⇒裏日本では「裏」＝半身不随論からの脱出と対岸幻想噴出

　建部遯吾（とんご）、松波仁一郎らの『東北評論』;

　・全樺太・沿海州の割譲、東清鉄道・満州の利権放棄

　・「日本領海」経営の主張一寒気に強い「特に我北越地方」

→日露漁業協約(1907、M40);大竹貫一念願の北洋開発

　天与の好版図～2点でなく面としての環日本海認識

→浦塩自由港閉鎖で期待はシベリアから満韓へ

→倭韓一国論:「出雲は東京、韓国は房総」という版図（久米邦武『裏日本』1915、大正4）　＊韓国併合（1910、M43）

- 裏日本の大正デモクラシー（1910～1920年代）

国権拡張主義⇔国際協調主義

国際協調主義の水脈：永井柳太郎（金沢）、大庭柯公、松尾小三郎、内藤民治（新潟）、『浦潮日報』

→1918年のシベリア出兵批判

＜シベリア＞

・1860年、ロシアのシベリア編入：その後しばらく多様な民族の自由な往来が続く

・極東（陸と海）の富源

・在留民の希薄な国家意識

・シベリア地方主義運動、植民地と本国の平準化要求

- 永井柳太郎：平和と親善、そして開発～白人勢力への対抗として日露協調を主張・東洋拓殖会社への批判
- 大庭柯公：国家的凝集力なきシベリア～多民族共生の場であるべき

＊侵略意識を無化する危険性もはらむ議論

- 松尾小三郎：米どころの米騒動＝民本的裏日本は半身不随→三井三菱的表の民衆的失敗→「帆船主義的経国論」：北前船（民衆的海運）時代に回帰し、食料のためにも中国大陸の港湾として孤島日本は生きるべき（生活本位の民衆主義）

- 内藤民治:『中外』と国際協調主義（W. ウイルソン）

「二十世紀は正に生存競争説改訂の時代」（124項）

→協調時代:国民経済と世界経済を抱擁する組織:国際連盟への胎動期

→小国主義の主張と民間外交重視（戦後に引き継がれる）　＊堤清六・日魯漁業会長（三条）

⇒ソ連承認と日ソ基本条約締結に尽力

・『浦潮日報』(1917創刊):出兵による日本人在留民への被害、「世界的市民」の主張

# ３　脱裏日本の道

１　大陸進出＝「表アジア」化への道～日中15年戦争期(1931-45)

表・裏の格差（人口、賃金、交通港）解消の模索：大恐慌と1930年代

☆昭和6年(1931)、上越線全通と満州事変：新潟にとって恐慌脱出の糸口・裏日本の玄関口候補へ（東京―新潟―清津―新京）

1931：10年で農林水産業生産額の暴落→北陸5割、山陰5割以上

＜克服策＞

北陸：福・石：人絹への転換、富：水力利用の工業化・不二越鋼材、新：水力と重化学

＊鉱工業・第2次産業（製造業など）の人口増

＊新：理研の大量生産方式工場→角栄の内陸型工業基地構想へ

☆恐慌打開として戦争への期待

- 日本海「湖水化」論～満州事変後の帝国主義化

吉林省進軍（林銑十郎）と「生命線」論（松岡洋右）

＊石川県出身者に満州国関係者多い（永井柳太郎ら）

「日本海を裏日本の湖水化せん」、「日本海は東洋の地中海」
「日本海の活用を以て表日本たる時運に逢着」

「裏日本」人の渡満

北陸道人・勤倹一旗組→朝鮮・満州：主に移民相手の商売

（朝鮮半島主流は九州、満州開拓団は新潟は5位だが裏全体では少なく人口比で平均以上程度）

＊満州移民送出港：敦賀港→新潟港

＊渡満者：裏日本の気候・旧弊からの解放感と中堅支配層としての倨傲

- 湖水化計画の実態

3大ルート：神戸ー大連、下関ー釜山、日本海ー「北鮮」

＊北鮮ルート：貿易額は全体の10％

昭和13–15年、北鮮三港（清津・羅津・雄基）にたいする北陸三港（敦賀・新潟・伏木）の一元化：送出母港の新潟港の飛躍

＊送出増の背景：昭和12年、「満州農業移民百万戸計画」と基幹ルートである羅津港の満州国による建設

昭和16–18年：機雷による気比丸沈没、南方戦線激化による船の引き抜き、米爆撃と内国貿易の日本海側シフト、太平洋側湾港の危険増大→湖水化計画は暗礁に乗り上げ、表の実質支配も変わらず

＊新潟港＝北海道の石炭受け入れ港→一時的に飛躍

日中戦争期(1931-45)

裏日本イデオロギーの発現と展開

＜裏：大東亜共栄圏的価値移転システムの玄関口へ＞

・満州国建国→裏日本＝表アジア意識

「表日本への黎明」、「表日本の本玄関」（建部・昭和16年）　＊新潟鉄道局の設置（昭和11年）

・自由民権の流れをくむ小作争議農民運動→対支出兵断固拒否の主張を止め、土地問題に特化

＊発現の伏線：植民地米の輸入、強制徴用による電源開発（信濃川水系の発電所建設など）

→表アジア幻想、敗戦で夢と消える

２　日本列島改造論

・敗戦後の闇市時代：地方の自立と表・裏逆転（朝鮮戦争まで）

＜池田内閣＞

・1960年、所得倍増計画

・1962年、全国総合開発計画（全総）

　　＊新全総（69）、三全総（77）、四全総（87）

・四大工業地帯→太平洋ベルト地帯

＊所得倍増計画：裏（154項の図の北東地帯）は棚上げ、

　山陰は「その他の地域」（中央地帯）、全総も踏襲

- 中央集権的分業

最大の投資・経済効率～中央・大都市・工業中心

・ベルト地帯以外の地域：「台所」か「便所」（宮本憲一、157項）

・水資源開発法（関東送水計画など）、公害の周辺部移転

・ベルト地帯の人口過密化：集団就職（「東京だよおっかさん」）、青田買い

・60年代、農林業人口4600万減少（出稼ぎなど）

・60年代、表・裏の格差拡大～法人税（東京・大阪は全体の60%，裏3%）、県民所得（東京は島根の2.5倍）

富士山型格差構造（全総策定者・下河辺淳）

・新全総：日本海地域を太平洋に結合一日本海地域の分断

・三全総：「日本海地域」の復活

→戦後も続く日本海側の後回し

→交通網の発達：北東・南西地帯（154項の図）の差異相対化：従来の「裏日本」特性が希薄化

日本列島改造論（1972、原型「都市政策大綱」）

＊豪雪地帯の「角の一声」

・計画案：工業再配置促進法、25万人都市の創成、交通通信ネットワークの拡充（平地5分の1の道路化など）、基幹資源型産業の創設（苫小牧東、むつ小川原、志布志湾など）

・総「表日本」化→土地の暴騰、物価狂乱、公害拡散など：「表」の矛盾の深刻化・広域化

＊安価な水資源や土地、労働を求めた工場移転は公害、過密、エネルギー対策にもなる一石二鳥

生産・経済効率至上主義と高度経済成長型分業体系（新たな格差システム）

・僅かずつ「格差」縮小～中産者意識の拡がり

・地方：単能・低賃金労働（高い女子就業率）

・チョウチン型：＜大都市―郊外―地方都市―地方＞

・優遇税制、財政投融資、補助金による開発→生活の視点なし

＊満州のように白地図扱いが続く下北半島（カミカゼ鉱山、引揚者入植地、基地、核）、「東京都湯沢町」のゴミ・地下水・治安問題とゴーストタウン化

# 終章　裏日本を越えて

１　内発的発展の道

・中央集権的産業主義（傾斜投資など）のその後

裏：転出超過、過疎・高齢化、県民所得格差・・・グローバル化のなかで裏日本の特性は解消され、「一般的な」社会問題になりつつある

・内発的発展論（鶴見和子『内発的発展論』＋宮本憲一『環境経済学』＋見田宗介）

グローカルな環境保全、地域の生活文化への利益還元、多様な産業関連を可能にする低成長路線、原点を消費に置く‘convivial’（自立共生的な）生活、地方自律・自治を鑑みた発展論

## ２　環日本海地域交流

・環日本海地域のこれまで：渤海国時代までの活発な交流、民間交流、そして帝国主義化、冷戦とその終焉、残存

・環の近年：交流の活性化～民際交流と企業進出（大東亜再版への懸念）＊「沿岸ハモニカ長屋」の競争的協力

＜環日本海とは＞

・多様性：人口1億を超える大国集中地域であるが多民族地域

・周辺性：入植地、流刑地、収奪地域が多い

・歴史性：侵略と国境問題→地域統合を妨げる国民国家の強化＊ディアスポラ朝鮮族への期待

・民間交流：万景峰号、新潟・ハバロフスク都市提携、日朝友好貿易日本海沿岸都市会議、ピンポン外交、「アレクセイちゃん」

・環日本海アイデンティティ～1970年代以降

産業主義で汚れた太平洋→「太平洋を繰り返すな」: 日本海連邦論　＊一方で東京志向も続く

・交流のありかた

前提:「大東亜」の再版あえいえない現状

ありかた: 地域的安全保障体制の確立、各国の経済後進地域における経済的相互補完

cf. 中日韓「三結合論」（経済合作）と平準化の努力

環日本海域（準閉鎖水域）の環境問題

・酸性雨、煤煙、水銀を含む廃液汚染、シベリア開発の危険性→北東アジアは協働で公害の海にならないよう協働すべき＊ECは地中海の環境問題への取り組みで地域統合を再起動させた

・先住民族を含む地域間の自律的交流実績をふまえ、生態系に配慮した海域空間を作るべく、自者肯定・他者肯定の「協働の哲学」（渋谷武）を作り上げる取り組みが重要

## ３　巻町住民投票

1969年、原発設置問題浮上～27年の学び

・80年代、漁業補償完了、町長同意・・・しかし保守系同士の「西蒲選挙」という悪しき伝統が「原発凍結」を選挙公約にさせてきた

・93–96年、佐藤「再選町長」3期目の選挙を迎え、設置推進が加速化→30代主婦層中心の「青い海と緑の会」、4、50代男性自営業者中心の「住民投票を実行する会」が誕生

- 住民投票条例に向けて

町議選（切り崩し）への取り組み、6団体の結束、町長リコール95年、条例制定、投票実施：61.2％原発反対～20年前と逆転

・巻町反対運動の分析（「表」の分業論理により、低人口地帯の原発3県に6割30基があるなかでなぜ反対できたのか）

・「生産の論点」対「生活の論点」

＊「東京に作れ」という裏イデオロギーからの脱却

・政争ではなく、住民による政治の実現

＊国策に対する地域エゴ批判に揺るがぬ当事者意識

→名護市への波及、珠洲市のその後

住民投票（直接民主主義）実現の背景

・「全日制町民」による学習運動←衆愚政治批判

・ヨメ、イエからの自立と女性町議の躍進

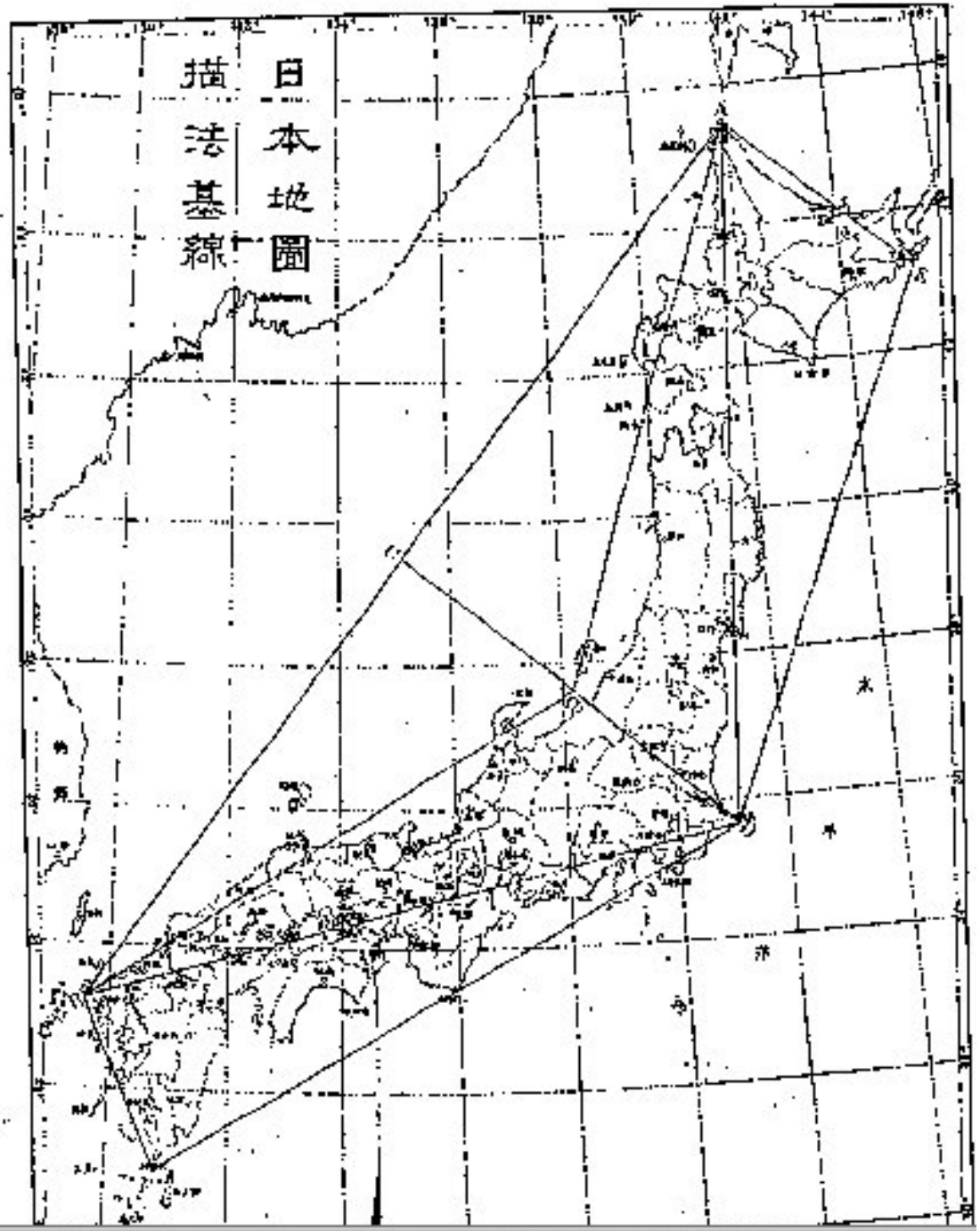
・西蒲選挙の地縁・血縁の政治への反感

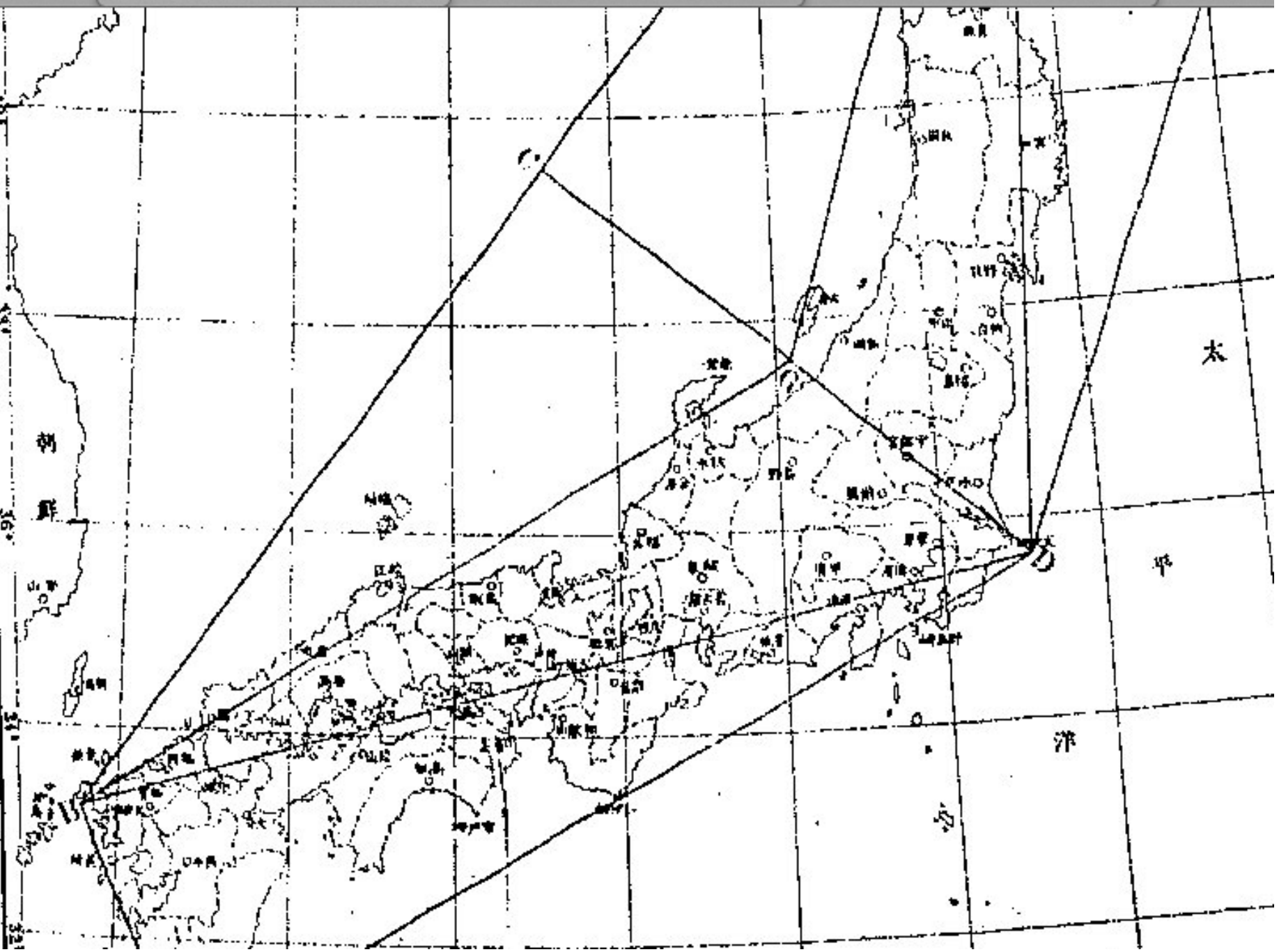
・間接民主主義による国策隷従化の長い経験

実現の補助線

・角田山の日蓮宗妙光寺「安穏廟」：無縁社会、国際化に対応する自立した個人のネットワーク作り

・巻ビジョン「土に根ざした使用価値」：ワイナリー、じょんのび館、地ビールの創出


日本地圖
描法基線


朝
鮮
太
平
洋

日本全國輿地圖